
七夕 S S ~ 織姫と彦星は今 . . . ~

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕SS ～織姫と彦星は今・・・～

【Nコード】

N8360M

【作者名】

brades

【あらすじ】

今日は一斉七夕デー。

またしてもハルヒはメランコリーモード。

だが、この前のとは少し違う憂鬱らしい・・・。

やれやれ、一体アイツは何考えてるんだ？

（前書き）

これは2010年の七夕にmixi日記にて公開したものです。

笹の葉ラプソディを見ているor既読の方は、そのまま入り込めるかと思います。

知らない方も、純粋な文章としてすんなり受け入れられる・・・はず・・・？（・・・）

ともかく、短編にするにも短い気がします、ゆっくりとお楽しみください^^

今年も全国一斉七夕デーがやってきた。

去年のハルヒは、軽々と相対性理論を無視して16年後と25年後の願いを書かせたのだが、今年もそれは敢行された。

そしてそのまま突っ走る・・・ことはなかった。

去年もハルヒは終始メランコリー状態だったが、今年もそれは健在していた。

何故かはわかる。だが、それは絶対にコイツに喋ってはならない。ハルヒが自分の能力を少しでも自覚してしまえば、古泉の胡散臭い有難くも無い話曰く、「予想も付かない緊急事態」になりかねないからなのである。

全く、つくづく面倒なご時世だぜ。

でも、今年の七夕は少し違っていた。ハルヒは相変わらず窓を向きっぱなしだったが、やたらと古泉がアイコンタクトしてきやがるのだ。

クソッ、気持ち悪すぎるぞ、お前。

連れシヨンの名目で一旦部室から出た俺達は、壁にもたれ掛かり、先程の意味の追求を始める。

「で、なんだったんだ、さっきのは。お前があんな気持ち悪い行動をしでかすということは、何かあるんだろ？」

「おや、貴方に気づいて頂き易くしたつもりだったんですが・・・まあそれはともかく、ご名答です。実は先程、涼宮さんは一つの短冊を書き、瞬時に慌ててポケットに入れていました。もしかすると昨年とは違う、涼宮さんをメランコリーにさせる原因があるのかもしれないですね。」

何故それを俺に言う？しかも何でお前そんなにニヤニヤしてんだ。

「貴方も人が良いものだ、と思ひましてね。・・・いやいや、こちらの話です。それよりも、我々の言いたいことはもうお解りでしょう？。」

「違う理由があるならハルヒに聞き出して元気にさせろってか？」

「さすがです。貴方と僕のコミュニケーションも大分スムーズになりましたね。」

やれやれ、褒めてるつもりなのかもしれないが、ちーっとも嬉しくないぞ。

夕方。

長門の本をパタンと閉じる音と共にハルヒはいそいそと部室を出ようとした。

「ハルヒ！」

まあ、依頼を受けたんだからな。出来る限りのことはやらなきゃな。

そう思つてハルヒを呼びかけた。

「・・・何よ？」

「そんなに急ぐことないだろ、少し散歩でもしないか？」

「・・・あんた、どうしたの？」

ハルヒがぽかんと口を開けている。・・・ん？俺何か変なこと言つたか？

ええい、面倒くさい！ついて来い！

「あつ、ちよつ、ちよつとキョン！？」

ハルヒを連れた俺は、いつもの中庭の方に出た。

「どうした、ハルヒ。最近元氣無いじゃないか。」

「・・・思い出し憂鬱よ。七夕の頃にはちよつと思ひ出が・・・つて、去年もあたし同じこと言わなかったかしら？」

ああ、聞いたさ。全く同じ話をな。

「本当にそれだけか？もしかしたら、他に何かあつたんじゃないか？」

ハルヒの肩が一瞬震えた。これは間違いないな。すぐ核心に迫れそうだ。

「話してみるよ。聞いてやるからさ。」

「・・・最近、みくるちゃん来るの遅いじゃない？」

ああ、確かに3年生になって、部室に来るのが遅いことはよくあるな。

「みくるちゃんは3年生になって、今年は受験。あたし達も2年生に進級した。時間の流れに逆らうことはできないけど、やっぱり少し寂しいのよね。」

「・・・何がだ？」

「あたしはこのままSOS団が続いて欲しいと思った。5人揃って、皆で楽しく遊んで・・・それも必ず終わりが来る。進路が決まれば、皆バラバラになるしね。」

なるほどな。要するに、コイツもコイツで寂しいと感じてたわけだ。確かに俺も高校に入って1年SOS団でやってきて、残り2年と言われれば寂しいと思う気持ちはわかるかもな。でも、俺はもつと違うことを思っていた。

「ハルヒ、大丈夫だよ。」

「・・・？」

「お前はSOS団団長だ。お前が願えば、必ず俺達団員は飛んでくる。古泉だって、朝比奈さんだって、長門だってそうだ。皆お前が好きなんだ。お前もそんな団員皆が好きだからこそ、寂しいと思うんだろう。だったら、進学しても会えるときに徹底的に遊べばいいんじゃないか？ 幸い俺だってそんな遠くの大学に行くつもりはな

いい、そんなに離れた場所で暮らすこともないだろう？」

これは本心だ。SOS団解散なんて、俺はいやだ。俺達SOS団はもう一つのグループとして確立されちまってるんだからな。

ハルヒが命令し、朝比奈さんはうるたえ、古泉は笑い、長門は無言。そして俺はぼやきつつもその命令に渋々と従う。

そんな毎日が俺は好きなんだ。

「ま、まあ、平団員にしては良いこと言うじゃない。少しは見直したわ。」

ハルヒもいつもの顔に戻っていた。やれやれ、一段落・・・

「やっぱりあんたはあたしがコキ使ってあげないと映えないみたいだしね。進学しても覚悟しておきなさいよ！」

・・・ではなかった。

まあいいさ。俺達は皆仲間なんだ、ほどほどに付き合ってやるさ。

・ ・ ・ あ、短冊の中身聞き忘れてた ・ ・ ・

短冊『キヨシと ・ ・ ・ SOS団監やずっとなー緒にいらねますよねっに ・ ・ ・
』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360m/>

七夕SS ～ 織姫と彦星は今・・・～

2010年10月9日22時36分発行